

18年前の1月、新年も20日を過ぎたばかりの大寒波が襲った日、我が家は不祥事から火を出してしまいました。強風にあおられ、あっという間に広がった炎は家を包み込み、どうするすべもありませんでした。わずかに残る焼け焦げた柱を見つめながら、誰ひとりケガしなかったことがせめてもの救いに思えました。

翌日は、近所の方が総出で家の片付けに取りかかってくれました。多くの方がお見舞いに訪れ、励ましの言葉をかけてくださいました。なかには、タオルや毛布を抱えてきた方、お下がり子ども服を、紙袋いっぱいにつけてきた方もいました。まだまだ厳しい寒さが続く中、いただいた少し大きめの服を子どもたちに着せながら、人のありがたさをしみじみ感じました。

そんな中、私が何よりありがたいと思ったのが写真でした。息子の同級生のお母さん方が、ノートやえんぴつ、手作りのバッグなどを持ってきてくださった際、あるお母さんがそっと差し出してくださったのが写真でした。子どもたちが保育園のころのもので、元気に遊んでいる姿や、発表会で楽しそうに歌っている姿がおさめられています。

「息子さんが写っているから、よかったらもらって」という写真は、どれも自分のお子さんが笑顔で写っています。その中で、息子がちょっとでも写っている写真を集めてきてくださったのです。大切な思い出をと思うと、その気持ちがうれしくてたまりませんでした。写真一枚残っていない私たちにとって、その写真のもつ意味は大きく、あふれ出す涙を止めることができませんでした。

平穏な生活を送っている今、一日たりとも人様のご恩を忘れたことはありません。家族が健康でいることに感謝し、これからはこのご恩を少しでも皆様にお返しできるよう、家族共々ががんばっていきたいと思います。